

<実践報告>

## 身体の動きを伴った音楽表現づくりにおける学びについて

桐原 礼 信州大学学術研究院教育学系

### Learning Musical Expressions Associated with Body Movements

KIRIHARA Aya: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	身体の動きを伴った音楽的な表現づくりにおける学生の学びについて明らかにする。
キーワード	身体の動き 協働 表現の拡大 学生の学び
実践の目的	身体表現による演出を伴った表現について追究する
実践者名	著者と同じ
対象者	信州大学共通教育カリキュラム教養科目履修学生 22 名
実践期間	2018 年 11 月～2019 年 1 月
実践研究の方法と経過	共通教育カリキュラム教養科目「芸術教養音楽ゼミ」の履修学生が、アンサンブル曲のグループ発表に向けて、身体の動きを含めた表現の工夫に取り組んだ。授業の振り返りシートの自由記述の分析を通して、表現づくりにおける学生の試行錯誤の様子や表現上の効果について検討した。
実践から得られた知見・提言	身体の動きを伴った音楽的な表現づくりに取り組んだ結果、他者を楽しませることができるよう表現発表にしたいとの意欲が高まり、様々なアイデアを出し合い、協働して取り組むことができた。そのような中で、音楽への新たな見方や自らの表現の広がりについて認識している姿を確認することができた。

## 1. はじめに

2017（平成 29）年 3 月告示の学習指導要領においては、小学校音楽科の「内容の取扱いと指導上の配慮事項」（1）のイにて、「音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽と関わることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること」とされており、今後一層、体の動きを伴う音楽活動を展開していくことが求められていると考えられる。また、小学校音楽科の改訂の基本的な考え方の一つとして「音楽に対する感性を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを見いだしたりすることができるよう、内容の改善を図る」とされており、「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標として、各学年の目標（3）に、「協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、様々な音楽に親しむ」ことが示された。今後ますます、音楽科教育における協働のあり方やその効果について検証していくことが重要視されていくと考えられる。

筆者はこれまでの研究において、学校音楽科における多文化協働実践に際して、身体表現の活用が多文化状況下の子ども達の関係性構築に役立つことを明らかにしてきており（桐原 2018）、「協働」や「多様性の認識」を促す身体表現のあり方について検討してきている。身体の動きやダンスの活動を積極的に行っているスペインの初等音楽科カリキュラムや指導内容の検討を通して、身体表現活動は、「社会性」や「文化的認識および表現」のコンピテンシー育成に深く関わっており、具体的には「音楽活動における対話や協働」「自らの身体の動きや感情の認識」「世界の多様な舞踊にふれることによる多様性の認識」、などのねらいがあることを導き出してきた（桐原 2017）。その他、スペインの初等音楽科教科書やスペイン人研究者による特別講義などにおける身体表現活動の先行実践の検討を通して、自身の授業実践（大学授業、免許更新講習など）に身体表現の要素を取り入れながら、日本の学校音楽科教育に向けた指導法について提案してきている（本多他 2018）。このような中で、ヴォイス・アンサンブルやボディー・パーカッション・アンサンブルによる楽曲の演奏や創作表現において、身体の動きによるパフォーマンス性を取り入れた表現づくりをすることができるという特徴を見出してきた。加えて、世界の多様な音楽の鑑賞活動においては、身体の動きと音楽との密接な関わりや、音楽表現に伴うパフォーマンス性について捉えることができるため、これらの表現の多様性について認識しながら、自らの表現に取り入れていくことができる可能性が予測された。

我が国の音楽教育学における身体表現活動に関する研究は、ダルクローズやオルフの理念および教育法に基づくものが多くみられ、例えば、塩原（2009）、菅（2010）、井上・柴田・塩原・中地（2014）、高倉（2014）などによって、指導法などの提案がなされてきている。また、今（2018）がスイスの小学校におけるリトミックの実践事例を検討しているなど、海外教育事情も報告されてきている。こうした身体表現に関する多くの研究は、子どもたちの音楽的な知覚・感受を促すことに重点が置かれており、音楽科教育における身体表現活動の意義を示している。金光（2018）は、民族音楽学における身体表現の捉え

方について検討し、学校音楽科における『身体表現』は、手段どころではなく、音楽実践そして音楽授業の要ともなりうる」と述べており、音楽と身体表現を切り離して考えるのではなく、一体化したものとして捉えようとしている点が示唆的である。また身体表現活動を通した学びについて、下出（1997）は、特別支援学校における創作表現の実践において生徒個々の心理的側面について検討している。「自分の表現の開発」「仲間との共存意識の発生と発達」について変容があったことを報告しており、身体表現活動における表現力の向上および協働の成果があることを提示している。その他、前田（2018）は、保育士養成学生のリトミック体験を通した意識変化について検討しており、指導者への成長過程における身体表現体験の重要性について述べており、今後ますます、保育士および教員養成課程においても、身体の動きを伴う音楽的な表現の指導について扱っていく必要があると考えられる。ボディー・パーカッションを取り入れた活動は、岡田（2003）などによって音楽科および特別支援教育に導入されてきており、白水・山田・日高（2013）は児童の効力感の向上に効果があることを立証し、山田（2017）はコミュニケーション能力を培うことができると述べている。今後一層、身体の動きを伴う音楽的な表現の体験による意識変容について明らかにしていくことによって、こうした活動の意義をより明確に提示していくことができるのではないだろうか。

そこで本研究においては、大学の学部生を対象とした授業内容として、身体の動きを取り入れた音楽的な表現の工夫に取り組む参加学生の心理的側面に着目する。他者と協働しながら身体表現を伴う表現づくりを行う中で、学生がどのような学びを得ているのかについて明らかにすることを目的とした。

## 2. 調査の概要

### 2.1 授業の構成

本研究に関わる実践は、信州大学共通教育カリキュラムの教養科目「芸術教養音楽ゼミ」（2018年度後期）における8回分の授業である。参加学生は22名であり、教育学部17名（音楽教育コース14名、国語教育コース1名、特別支援教育コース1名、心理支援教育コース1名）、他学部5名（繊維学部3名、工学部1名、中国人留学生1名）であった。

「世界の多様な音楽表現から学び、自身の表現の幅を広げる」という授業テーマにおいて、世界の様々な国および地域の音楽について、声や身体の動きの特徴を読み取る鑑賞活動を行うことで、表現の多様性について認識しながら、自らの声や身体の動きによる表現に広がりを持たせられるようにした。続いて、「声」の表現の追究として、ヴォイス・アンサンブルのグループ演奏に取り組むこととした。その後、これまでの鑑賞活動および声の表現から得られたアイデアなどを活かしながら、「身体の動き」を中心として、ボディー・パーカッション・アンサンブルの表現を工夫できるようにした。授業8回分の概要は以下のものである。

①世界の様々な国および地域の音楽の鑑賞

DVD「ストンプ・オデッセイ～リズムは世界を巡る～」より、声と身体の動きに関わる部分の映像を見て、表現の多様性について認識する。

〈声の表現〉

ケチャ、ブルガリア女声合唱、ホーミー、声明（日本とチベット）

〈身体の動き〉

ボリビアの舞踊、スペイン・カタルーニャ地方の舞踊、

インドネシアとハンガリーのボディークッションを伴った舞踊

②ヴォイス・アンサンブルのグループ演奏

「世界地図のフーガ」（エルンスト・トッホ作曲）

③ボディークッション・アンサンブルのグループ演奏

「Rock Trap」（ウイリアム・J・シンスタイン作曲）

## 2.2 調査対象

上記の授業の中で、特にボディークッション・アンサンブルのグループ演奏（「Rock Trap」）に取り組んだ4回分の授業を本研究の分析の対象とした。参加学生は、グループ活動（4グループ、各5～6名）において読譜を丁寧に行い、強弱やアクセントほか音楽的な表現の追究を基礎として、その後に身体の動きを中心とした演出の工夫に取り組むこととした。この際、楽譜上の音のアレンジは行わないことをルールとした。第4回目に発表会を実施し、発表の録画ビデオを視聴しながら、学生が自身の表現について客観的に評価できるようにした。また参加学生は、毎回の授業後に振り返りシートを記入した。

## 2.3 分析の方法

学生の振り返りシートの自由記述、発表会部分の録画ビデオを分析の対象とした。

身体の動きを伴う表現づくりにおける、①協働の効果、②表現上の効果、について分析の視点とした。

## 3. 結果と考察

### 3.1 音楽発表における演出の工夫

グループ発表においては、ソロの部分で一人ずつ動きを変える、ペアで向かい合う、縦に一列になるなど、身体の動きを中心とした様々な工夫がみられた。例えば、グループAの表現（テーマ：通勤電車）は以下のものであった。

（演奏開始前）通勤電車に乗っている会社員風の様子をイメージしている。リクルート・スーツ風の姿で、黒靴にメガネの装いで、ステージに横一列に並び、つり革にかまっている様子。

電車のアナウンスの音源)「まつもと～まつもと～ まつもとに到着です」

(演奏開始後) 車内でボディー・パーカッションの演奏が始まり、1人ずつ音が増えて盛り上がってくると、「Si, Si, Si」という楽譜上の表現を「車内で静かに」という意味として用い、腕組みをしながら周囲に注意するような身振りをつける。これに全体の演奏が反応して次第に音を弱くしていく。

(ソロ部分) 後ろ向きで静かにつり革につかまっている様子。ソロ担当の部分になると、振り返って演奏する。楽譜上の「足踏み」の部分で、黒靴のサラリーマンが足音を立てながら歩いている様子として表す。

(終盤) 全員で腕を組んで元気に「足踏み」の音を立て、楽譜上の音を終える。

(電車のアナウンスの音源)「まつもと～まつもと～ まつもとに到着です」

一人ずつ電車から降りて去っていく(席に戻る)。

### 3.2 協働面および表現上の効果

学生の自由記述において、協働面および表現上の効果に関する記述を抜き出したところ、「演出づくりにおける課題とその解決」、「演出の要素を取り入れた表現づくりの効果」、「自身のものの見方の変容」というカテゴリーが挙げられた。

以下に、具体的なカテゴリーとその記述の抜粋を挙げる。(学生のコメント部分の下線は筆者による)

#### 3.2.1 グループ・ワークにおける課題とその解決

アイデアの出し合いにおける困難に直面しながらも、それらをグループ内で解決しながら、追究の楽しみとして捉えている様子が伺えた。また、演出づくりに向けた理想を掲げ、積極的に取り組む姿勢がみられた。

〈困難：アイデアがまとまらない、アイデアを出せない〉

・アイデアを出したが、あまりまとまらなかった。テーマ性よりも動きの面白さから決めようとしたところ、人数が多かったり、発想の手がかりが少なかったりして難しく感じた。

・あまり表現のアイデアを出せないメンバーがいたので、「ここからは〇〇さんが表現を考えてみて」という風に少しでも分担作業を入れたら、全員の意見が入ったパフォーマンスになったかなと少し反省した。

・私はほとんど意見を出せず、みなさんの引き出しの多さにただただ感動していました。

〈アイデアを出し合う楽しさ〉

・楽譜から様々なアイデアを持ち寄って曲を作っていくという過程がとても楽しい。

・面白いアイデアがたくさん出たので、なるべく全て活かして発表が見映えするものになるよう更にグループで練習していきたい。

〈演出づくりの理想と困難、積極的な姿勢〉

- ・より聴いている方に、自分たちの表現が伝えられる音楽を目指すべきであると思う。聞いている側をもっと楽しませるように工夫したい。カッコいいパフォーマンスをしたい。
- ・耳だけでなく、視覚的にも楽しんでもらえる発表になればと思う。
- ・私たちのチームは、和風な感じで動きやかけ声をつけたので、他のチームにはない個性が聴いている人にも伝わるようにしたい。
- ・曲や強弱に合った動きを考えるとというのが難しいと感じた。動きなどで、きいている人が、音ももちろんだけど、視覚的にも音楽を楽しめたり、音楽を感じてもらえるようにしたい。

### 3.2.2 身体の動きを伴った表現づくりの効果

身体と音楽表現の結びつきに気づきながら、他者のアイディアから刺激を得たり、協働して取り組んだりする様子がみられた。

〈身体と音楽表現の結びつきに気づく、暗譜を促す（身体が覚えている）〉

- ・この授業を通して一番感じたことは、身体と音楽の結びつきの強さ、大切さです。音楽的にリズムを感じていないと、身体的な表現もうまくできないと思ったし、身体を通して音楽を感じたり表現するからこそ、豊かな音楽になるのだと感じた。
- ・音を体の動きで表現していかないと、フレーズ感を出せないなと感じた。
- ・本番は緊張して楽譜がとんでしまったけれど、体が覚えていて、リズムを感じながらできました。
- ・「体を使う」ことによって、楽譜を早く暗譜することができ、体を使うことの効果を知った。
- ・振付が入ると、楽譜が覚えやすくなって、暗譜に一步近づいた。

〈協働の利点に気づく〉

- ・今まで、一つの事に対して多くの人と考えを共有し、作り上げるということが少なかったので、とてもいい経験となった。
- ・練習を通じて、日本人の学生たちと触れ合い、仲間になって、距離感がだんだんなくなりました。音楽を通じて、言語や文化的な違いもなくなって、本当に楽しかったです。

〈他者のアイディアから刺激を得る〉

- ・同じ曲でも振付や衣装で全く違う雰囲気を出していた。他の班の発表から、曲中に出てくるテンポに合った動きをみて、「こんな動作もできるんだ」と驚かされました。
- ・他のグループは、コンセプトを決めて劇のようにしたり、叩く場所を変えて音に変化をつけたりしていて、工夫がすごいと思いました。見ていて面白かったです。
- ・他のグループは、テーマを決めて演奏を行っていたり、強弱などすごく音にこだわって



やっている部分が多くて、見ている面白かったし、自分に思いつかなかった表現が多くあって、勉強になりました。やはり、体全体で音楽を感じて表現するって大切だと感じました。

・どこのグループも凝った工夫がされていて本当に素晴らしかった。“電車”というコンセプトがしっかりしており、「シーシー」のタイミングも「静かに」というような表現が伝わってきた。

・ストーリー性のある発表が印象に残った。電車のアナウンスをとりいれ、サラリーマン風の服装をすることで、いままでのただの楽譜のイメージが、その場面へのイメージへとガラリとかわった。

### 3.2.3 自身のものの見方の変容

身体そのものを楽器として、他者と共に表現することにより、自身の表現の幅の拡大や、音楽への見方が変化したという意見が挙げられた。

〈自身の表現の広がり〉

・普段は楽器を使って表現することが多いので、どうしても幅が限られてしまうことがあるのですが、今回は自分そのものが楽器となった分、動きやかけ声、表情などあらゆる場面でさらに表現の幅が広がったと感じることができました。またそれを他の班と見せ合うことで新たな表現の可能性に気づき、常に学ぶことができました。

・いろいろな身体表現を学び、自分の中でアンサンブルにおいての意識が変化した。今までは、楽器などのアンサンブルをしていたとき、自分が必死で周りに合わせようと思っていたが、音をきくだけでは合わなかった。しかし、体をうごかし、目の前から楽譜が消えたとき、初めて、他の人の音だけでなく、動きや息づかいをみたりききとったりするようになった。耳だけでなく、目や身体全体で音楽を感じることの大切さを実感した。

〈音楽への新たな見方〉

・「音」は単に耳で聞こえている「音」という意味ではなく、目や手など五感をフルに使って表現するものだと思います。今回の授業を通して、自分の頭の中にある「音楽」の概念がものすごく広がったと思います。今回の授業を通して学んだことを生かして、今後の自分の「音楽」の考え方に活かしたいと思います。

・楽譜の音が読めなくても、音程が分からなくても、身一つで音楽を楽しむことができるものであるということを改めて感じた。普段、自分たちが演奏する西洋音楽は楽譜にしばられがちであるが、楽譜どおりに演奏するだけでは面白くなく、アレンジして、自由に楽しんで演奏できると思った。

・普段自分は音楽をするとき、ピアノやトロンボーンなどを用いて行いが、今回は、自分の体や声など、とても身近なもので音楽をした。こういった経験から、自分の中で新たな音楽の形を見つけることができた。

### 3.2.4 音楽指導者としての視点

特に教員養成課程所属の学生より、楽器によらない音楽表現の楽しさや気持ちよさ、音楽的な感性や創造性の伸長に役立つなどの教育的意義への気づきや、多様な音楽を教材として取り上げていく重要性についての意見が挙げられた。

〈楽器によらない演奏の教育的意義（楽しい授業、創造性や感性の伸長、多様性）

・音楽教育と聞くとかたくなるしい、難しいイメージがあったが、楽しみながら学べました。

自分が教師になった時に参考になると思ったのは、楽器を使わない音楽です。小さい子どもにまだ楽器は難しくても、例えば先生の真似をして手拍子をするゲームをすれば、楽しみながらリズム打ちを学べるし、音を出して表現する気持ちよさも味わえます。今後さらに学びながら、子どもが楽しめる授業づくりができるようになりたいです。

・このような身体を通しての音楽表現は、自分が教員になった時にぜひとりいれたいと自分がやっていて感じた。音楽が苦手な生徒も、音楽の楽しさや良さを感じるきっかけになるし、子どもたちの音楽の感性を磨くことにもつながると思いました。自分自身、もっと音楽の感性をみがきたいし、授業を通して、学んだ様々な表現を活かし、自分の音楽の表現の幅をさらに広げていけるようにしたいです。

・私たちは、体を多く動かすことで、見ている人たちにワクワクとした刺激を与えることができたと思う。教師になって子ども達に行ったらより刺激的で創造力が身につくと感じた。

〈音楽の多様性の尊重〉

・世界には様々な音楽の形があって、自分が今まで小・中・高で学んできた西洋音楽はその一部にすぎないということを強く実感した。ボディーパーカッションは、知ってはいたけれどやったことはなかったので、実際にグループの皆と練習して発表できたのはとても楽しかったし、良い経験になった。小・中学校のうちから、この授業のように西洋以外の音楽に触れる機会があれば、より多くの子どもたちが音楽を好きになってくれるのではないかと思う。

## 4. まとめ

本研究においては、身体の動きを伴う音楽表現づくりにおいて、どのような協働面および表現上の効果があるか、学生の学びについて明らかにすることを目的とした。身体の動きを中心とした演出について工夫していく際に、発表時の鑑賞者の立場を意識し、演出によって「見せる」「楽しませる」ということを中心に据えて表現を追究している姿がみられた。その工夫においては、「アイデア」が不可欠であり、アイデアを出し合ったりまとめたりする難しさに直面しながらも、メンバー同士で助け合い次第に団結して、困難を乗り越えようとする協働の様子がみられた。同じ楽曲を扱いながらも、グループごとに違っ



た見せ方をしようと表現していく中で、様々なアイデアを実践したり他者の表現から刺激を得たりするなどして、自身の表現の幅が広がったとする意見も挙げられた。楽曲の読譜や強弱などの音楽的な表現の追究を基礎としながらも、身体の動きによって楽曲を表現することにより、身体と音楽との密接な結びつきに気づくなど、音楽への新たな見方をしている学生が多くみられた。こうした経験を自身が指導者になった際の音楽指導に生かしていきたいとする意見も挙げられた。

身体の動きを伴う音楽表現においては、楽曲の音楽的な表現の追究を基礎としながらも、協働によるアイデア出しや、他者に「見せる」「楽しませる」という視点が重要視されていることが示された。このような経験において、協働によって困難を乗り越える達成感や、自身の表現や音楽への見方を拡大していく可能性が見出された。

## 付記

本研究は、日本音楽教育学会北陸地区大会における口頭発表の一部を加筆・修正したものである。また本研究は、科学研究費助成事業「基盤 C」（課題番号：17K04761）の助成を受けて行われた。

## 文献

- 本多佐保美, 中嶋俊夫, 齊藤忠彦, 桐原礼, 2018, 新版 小学校音楽科教育法, 教育出版株式会社
- 井上恵理, 柴田礼子, 塩原麻里, 中地雅之, 2014, ダルクローズ・リトミックとオルフ・シュールヴェルクにおける〈リズム〉〈動き〉〈ことば〉, 音楽教育実践ジャーナル, 12(1), pp.54-69
- 菅道子, 2010, 子どものための参加型音楽プログラムの構成要件—ロンドの理解を目指した〈音楽のサンドウィッチをつくろう〉を事例として—, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 20, pp.105-113
- 金光真理子, 2018, 音楽科における「身体表現」の再考: 「音楽」と「身体表現」の関係性, 横浜国立大学教育学部紀要, 1, pp.1-22
- 桐原礼, 2017, 身体表現活動を通じたコンピテンシー育成に関する考察, 日本音楽教育学会第48回大会(於 愛知教育大学), 発表資料
- 桐原礼, 2018, 多文化状況下における児童間の関係性構築に向けた音楽教員の対応に関する考察—スペイン・ムルシア州におけるインタビュー調査を通して—, 音楽教育学, 47(2), pp.25-36
- 今由佳里, 2018, ジュネーヴ州の音楽教育に関する一考察: 公立幼稚園および公立小学校における「リトミック」授業, 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, 5(2), pp.1-10
- 前田知子, 2018, 音楽表現に対する保育学生の意識変化について—リトミックが及ぼす1年生への影響を中心に—, 下関短期大学紀要, 36, pp.99-114

- 岡田加津子, 2003, ボディ・パーカッションのこれから, 音楽教育実践ジャーナル, 1(1), pp.44-53
- 下出美智子, 1997, 音楽の授業における楽しさについての一考察—創作活動の実践分析を通して—, 大阪教育大学紀要, V, 45(2), pp.237-245
- 塩原麻里, 2009, ジャック=ダルクロワーズのリトミック—「聴くからだ」と「演奏するからだ」をつくる音楽教育の基礎として, 音楽教育実践ジャーナル, 6(2), pp.55-62
- 白水晶子, 山田俊之, 日高三喜夫, 2013, 児童におけるボディパーカッションの効果に関する基礎的研究, 久留米大学心理学研究, 12, pp.98-105
- 高倉弘光, 2014, 小学校低学年における動きを伴った鑑賞授業—ダルクロワーズ・リトミックとの関連から, 音楽教育実践ジャーナル, 12(1), pp.75-78
- 山田俊之, 2017, 全国アンケート調査に見る, ボディパーカッション教育の可能性: 児童・生徒のコミュニケーション能力を高めるリズム身体活動の一考察, 九州女子大学紀要, 54(1), pp.139-156

(2019年9月20日 受付)